



TITLE:

アッバース朝における豫算財政について(上)

AUTHOR(S):

清水, 誠

CITATION:

清水, 誠. アッバース朝における豫算財政について(上). 東洋史研究
1960, 18(4): 530-545

ISSUE DATE:

1960-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148168>

RIGHT:

アッバース朝における豫算財政について (上)

清水 誠

- 一 まえがきと史料
- 二 會計年度
- 三 國家豫算表(以上本號)
- 四 稅務行政と徵稅請負(以下次號)
- 五 財政補填策としての公債の發行とアル・サワードの穀物行政
- 六 結 語

一 まえがきと史料

アッバース朝は大體三期に分れる。第一期(132-218H/750-836)は確立期からいゆる黄金時代にかけてで、その專制體系はウマイヤ朝から引續き長官獨裁制がまだ強力であつたが、次第に中央集權化の傾向をたどつた時代である。第二期(218-279H/836-892)はカリフ al-Mu'tasim アッ・ムタシム によるトルコ奴隸の傭兵的採用に始まつた軍閥跋扈の時代で、

サーマッラー遷都時代に當る。第三期(279-334H/892-945)はカリフ al-Mutadid アッ・ムタディド に始まり、官僚機構が極度に發達し第一期の末期にすでにその萌芽が認められる官僚獨裁制の強まつた時代で、カリフを含めて各個人の權力が非常に微力であり、従つて末期になるほど文官武官入り亂れての派閥争いが激化し、軍人出身の amir al-umara' アミール・アル・ウマラー (大總督)の成立(九三六)の頃にはアッバース朝權力はすでに内部的に崩壊し、ブワイ朝のバグダード占領(九四五)によつて狹義のイスラーム帝國は終りを遂げる。これらの時代を通じて見られることは官僚政治の優位化の現象であつて、これは國家機構の複雑多岐化とそれによつて起る財政經濟に關する専門的知識に對する要求の増大から生れることとは云うまでもない。本稿では豫算表の作成を中心として、

アッバース朝の豫算財政の實態を把握し、それを強力に支えるものとして徴税請負を取りあげ、これらの分析を通じて當時の社會構成の一端を明らかにしたい。

さて當面の問題解決に堪えうる史料であるが、ここでは主要史料特に根本になる史書のみを略稱とともに時代別に列挙する。なおアラビア語の轉寫法は次の通りとする。

ゝ (語頭省略), b, t, ṭ, ḡ, h, ḍ, d, r, z, s, š, ṣ, ḍ, ṭ, ḡ, f, q, k, l, m, n, h, w, y. taḥ marbūṭa = a, at. 冠詞: al, -l- (カタ表記も常にアル・とする)。長母音: ā, ī, ū. 二重母音: aw, ay.

第一期

タバリー (Tab.) al-Tabari (310/923 迄): Ta'riḥ al-umam

wa-l-mulūk, 8 vols, Cairo, 1938-39. (302H ㊦㊧)

シャーンシャリー (Ḡaṣṣ.) al-Ḡaṣṣiyyān (331/942 迄): Kitāb al-wuzarā' wa-l-kuttāb, Cairo, 1938. (現存部分は第七代カリフ al-Ma'mūn 治世の途中㊦㊧)

第二期はタバリー以外なし

第三期

ヒヤリ (Hiāl) Hiāl al-Sābi' (447/1055 迄): Kitāb tuḥfat al-umarā' fi ta'riḥ al-wuzarā', Leiden, 1904. (収録部分は ㊦㊧ 316H ㊦㊧)

ミスカウィ (Misk.) Miskawayh (420/1030 迄): Taḡarīb al-umam, 7 vols, London, 1920-21. (295H ㊦㊧)

アリブ (Arib) 'Arib b. Sa'd (366/976-7 迄): Siyat ta'riḥ al-Tabari, Leiden, 1897. (291H-320H)

スリー (Sulī) Muḥammad b. Yaḥyā al-Sulī (335/946 迄): Abbar al-Radi wa-l-Muttaqi, from Kitāb al-awraq, Cairo, 1935. (322H-333H)

ハリーズミー (Maḥ.) al-Hwārizmī (366/976-7 著): Maḥāṭib al-ʿulūm, Cairo, 1342H. (これは史書でなく、簡易語彙集とも云うべきものであるが、その語解は第三期の資料解讀に重要な示唆を與え、文字通り鍵となる。)

このように時代によつて史料の偏在が甚だしく、しかも著者の意圖によつて史料の性格が異なるにもかかわらず、これらを同一視して使用することはアッバース朝の發展を見失うことになる。特にこれまでの研究では著作年代もまちまちの法理論家達の理論體系をそのまま利用した制度史的研究が多く、その誤りであることは近年の歐米の學界でも強調されている。従つて各々の出典に留意しつつ、コンテンポラリーの史料が比較的豊富な第三期をあくまで基點とし、國家財政の實際面から考察を進めることにする。

註

- (1) 藤本勝次「カリフ・ムウタシムとトルコ奴隸兵」(石濱先生古稀記念東洋學論叢) 参照。

(2) D. Sourdel: La valeur littéraire et documentaire du
 « Livre des vizirs » d'al-Ġāṣṣiyāri (Arabica II/2. pp. 193
 -210) 参照。

(3) D. Sourdel: L'originalité du Kitāb al-wuzarā' de Hīāl
 al-Ṣabī' (Arabica V/3. pp. 272-92) 参照。

二 會計年度

まず豫算制度の前提條件である豫算の年度獨立性の成立過程を取りあげるが、これは曆法と關連してイスラームの財政史では無視しえない問題だからである。第三期に入つてまもなく、回曆二八二(八九五)年にカリフ al-Mu'tadidによつて畫期的な改革が行われた。これに關する史料を綜合すると、*ḥarāḡ* 即ち農產物租税の徵集開始期 (iftitāḥ: Mat. 40 参照) をペルシア曆の *jurdād* (III) 月一日、シリフ曆の *ḥazīrān* (IV) 月一日とする *Nawrūz* (Nayrūz, Nowrōz) を新設し、これを *Nawrūz al-Mu'tadidi* と名づけた。これは徵稅納稅兩者の立場から穀物の收穫期を考慮して行われた處置で、この日は夏至に當る。このような試みはカリフ *Harūn al-Rasīd*, *al-Mutawakkil* によつてなされたが、いずれも實現に至らなかつた。この *Naw-*

rūz はペルシアの元日で、太陽曆の第一月 *fravardin* 一日である。サーサーン朝ペルシアでは幾つかの曆が行われていたが、太陽曆では *fravardin* 月一日を春分に置く宗教曆のほか、これを夏至に置く農曆があつて、時代によつて變遷があるが、一般には後者が用いられていた。これは西アジアの農業特に穀物の栽培が秋に耕作播種して夏に收穫するため、*Nawrūz* は收穫祭でもあり、納稅期でもあつた。ビールニーの *Nawrūz* の説明 (215-19, tr. 199-205) もはつきり夏至を指定している。イスラーム曆は太陰曆で、しかも宗教的に閏月を設けなため、これによる農產物の徵稅は困難で、ペルシアの *Nawrūz* を採用した。ところがサーサーン朝の没落後、このペルシア曆に閏を設けることができないので、一二〇年に一ヶ月の割合で *Nawrūz* が春に接近し、*al-Mu'tadid* の頃には約二ヶ月の差が生じ、徵稅に不都合となつていた。(3) この改革は全國の徵稅官に發令されたわけであるが、問題は中央地方を問わず、徵稅開始期およびそれに始まる年度——*ḥarāḡ* 年度 (*sanat al-ḥarāḡiya*)——による財政上の實情はどうであつたかである。ミスカワイフによれば「三〇四年 *dū l-ḥiḡga*

(Ⅻ) 月八日 (九一七・六・一)⁽⁴⁾ に *Ḥan al-Furāt*⁽⁵⁾ が第二
 次宰相になったとき (Misk. I. 41; *ʿArib* 61) 財政状態は
 良好であつたが、その理由として、

〔前宰相〕*ʿAlī b. ʿĪsā* は〔三〇五年度の〕*ḥarag* から前借を求
 めていた (*ʿġaslatā*)。即ち彼はすでにその徴税開始期の前にその
 一部を徴集してつて、しかもそれは彼が免職になる十日前に始め
 たばかりであつた (Misk. I. 42-43)。

とあり、また回曆三一九 *ramadān* (Ⅸ) 月末頃に宰相とな
 り (Misk. I. 219; *ʿArib* 164) 三二〇年 *rabīʿ al-ābir* (Ⅻ)
 月末頃 (九三二・五・八頃) に免職になった *al-Ḥusayn b.*
al-Qasim はいつて、三二〇年 *rabīʿ al-awwal* (Ⅲ) 月下
 旬頃、

彼は三二〇年度の税金よりの前借を求め、徴税開始期の何ヶ月か
 前にその半額を支出してしまつた。即ち彼には三一九 *ḥarag* 年
 度 (*sanat* 319 *al-ḥaragīya*) の歳出〔豫定〕額を完済する巧みな
 手段がなかつた。……

それで *al-Ḥashī* が宰相になるよう交渉されたが、まだ三
 一九年度が三ヶ月残つているのにその豫算はどこにもない
 し、その上三二〇年度も半分しかないと云つて斷つてゐる
 (Misk. I. 226)。これらから原則として *Nawrūz al-Mu-*

tadīdī に年度の交替期を認めた上で、翌年度分よりの繰上
 げによる財政調整を行つており、その根底に當該年度の歳
 出入豫算額について歳計上の年度獨立性を見ることができ
 る。これは實際の徴税業務上でも同様であつて、次の史實
 から明證できる。回曆三〇三年 *raḡab* (Ⅶ) 月一日 (九
 一六・一・二五) に宰相 *ʿAlī b. ʿĪsā* はいつて *Fārs* の補
 足徴税法 (*takmilā*) 廢止が發布され、「三〇二 *ḥaragī* 年
 度において補足徴税法民のために 1,000,000 *dirham* を
 斟酌した」。發布の三〇三年 *raḡab* (Ⅶ) 月はまた三〇一
ḥaragī 年度であつて、三〇三 *ḥaragī* 年度は三〇三年
ḥu l-ḥiḡga (Ⅻ) 月から始まり、この税法は三〇一 *ḥaragī*
 年度の途中から廢止されたことになる。またこれまづの補
 足徴税金の穴埋めとして、果樹税を三〇二 *ḥaragī* 年度
 の缺損分だけ當該徴税官代理に試みに徴集させ、三〇三年
 度から正式にこれを施行してゐる (*Ḥilāl* 339-45)。

ところが第三期も末期になると、財政破綻からこの年度
 獨立性は徴税開始期の變動によつて怪しくなる。

この月 (三二四年 *al-muharram* 月/九三五・一二) に宰相は
ḥarag の徴税開始を命じた。人々はこれに驚いた (*Sūfi* 71)。

〔三二九年／九四一・四・初頃〕 Ahmad b. 'Ali [al-Kūfi] はすでに第一 Nawruz (Nawruz) barāg の請求を始めていたが、徴税開始期を Nawruz al-Mutadidi まで延期するよう〔大總督〕 Bag-kam の命令が發せられていた (Sūi 197)。〔三三一年 ragab 月下旬頃〕 Ibn Mugatil は徴税官達に人民に對する〔納税の〕督促をうながしたので、彼らはあらゆる不法行爲を行つた。彼は期限前に barāg の徴収をさせようとしたが、人民はこれに騒いだ。そこで徴税開始期を Nawruz al-Mutadidi まで延期すること、………が布告され、人民は一息ついたが、この布告は守られなかつた (Sūi 238)。〔同年〕人民は Nawruz al-Mutadidi を待つことなく šaḥān 月 (九四三・四・一〇—五・八) 中に barāg の支拂を要求された (Sūi 240)。

一方イスラーム暦で徴収される税があり、これについての原資料は皆無に近いが、Kitāb al-hawī によれば、

「太陽暦で徴収されるものほか」 mugāṭa' mutaragā' 人頭税 (ḡawālī) 水車税 (arṭā) 等々に係る税種は al-muḥarrām (I) 月に始まる太陰暦によつて支拂われる。………

とあつて、これに對して二つの理由が擧げられている。

一、收穫期や耕作期、生産物の保存などを考慮する必要がないこと。

二、太陰暦年と barāg 暦年との約十二日の差を理由に政府 (sultān) が都合のよいときにこの太陰暦による

徴税開始期をきめることができる。⁽⁹⁾

これによつて太陰暦による徴税が不定期で、しかも太陽暦による barāg 年度の財政を調整するために用いられていたことが分る。三〇六年度の 'Ali b. 'Isā の國家豫算表(後述)には人頭税 (ḡawālī) 市場税 mugāṭa'āt (定額貢納) 金などの事項が含まれている。これは太陰暦で徴収されるが、その年間豫定額が barāg 年度の豫算表に組込まれたものと解すべきで、barāg 年度は即ち會計年度でもあり、國家財政の収入源の大部分を農産物租税に頼るアッバース朝としては當然であらう。

第一、第二期の徴税開始期については資料不足のため明らかにしたいが、二三の例からまだ多分に地方分權的であつたことが分る。例えば回曆二二四(八三八—三九)年に Tabaristān Rūyān Dunbāwand の總督 (šahbaq) Māzīyāt b. Qarīn が徴税官に出した手紙のなかで、徴税開始期に關して、

「……我々はすべて Amul u al-Rūyān (すなわち Tabaristān の重要都市) の税穀仲買人 (būndar) に書簡を送り、彼らの管區 (amal) における barāg の決算 (isṭiḡāq) を tir (ペルシア暦 VI)

月末までの猶豫を與えて命じている。これを知つてお前の擔當税額を調べあげ、お前の徴税區民に課せられているものを全額収税せよ。残額を一 dirham でも持ったまま tir 月を過してはならない。……」

と命令が出され、

al-Mazīyar [b. Qarin] の手紙が徴税官 Sādan b. al-Faḍl に到着し、人々は barāg を徴集されたが、全 barāg が二ヶ月間に徴集された。これまでは一年間にわたつて四ヶ月毎に三回徴集された (Tab. VII, 284-85)。

とある。この二ヶ月間というのは ħurdad (III) 月初から tir (IV) 月末までである。當該年の Nawrūz 即ち fra-wardin (I) 月一日は計算上四月二十五日頃となるから、當面の徴税開始期は夏至をやや過ぎた六月二十五日頃になり、収獲の實情に則して行われている。また回曆二五三年 al-Ġibāl (中部イラン) の總督に任命された (Tab. VII, 513) Musā b. Buga al-Kābir が al-Muntadī のカリフとなつた情報を聞つて二五五年 ragāb (IV) 月に首都 Samarra へ歸任したときの事件について、

……Musā [b. Buga] は二五六年度の徴税開始を二五五年 rama-dān (XI) 月一日月曜日 (八六九・八・一二) にぎめ、その日に

500,000 dirham を徴集した。そこで al-Rayy の住民が集まり云つた。「總督様、貴方は部下達 (al-mawālī) が Samarra に歸ることを斷言しておられる。……總督は我々を棄て、我々から離れていくことを決心しながら、しかもまだその耕作も始まつていない年の barāg を取立てられて一體何が残るのでしようか。二五五年度の収獲の大部分はすでに總督が近づくことさえ不可能な不毛地からでも barāg として取立つてしまつた」。しかし總督は立去り、我々が述べ求めたことに心動かさなかつた。…… (Tab. VII, 541)

これは中央政府や納税者側の意向を全く無視した例であるが、第一、第二期では徴税開始期の決定權は總督もしくは當該徴税官に屬してつたと考えられる。

註

- (1) Tab. VII, 387; VIII, 169-70; al-Birūnī (440/1048 笈): The chronology of ancient nations, (tr. C.E. Sachau, London, 1879), 32-33 (36-38); Mas'ūdī (345/956 笈): Les prairies d'or, (9 vols, Paris, 1861-77), VIII, 206; Ibn al-Ġawzī (597/1200 笈): al-muntazam fi ta'rīḥ al-mulūk wa-l-umam, (Haydarabad, 1357-9H), V, 149; Ta'rīḥ-i Qumm, (Tehrān, 1313H), 144. (A. K. S. Lambton: An account of the Tarikhi Qumm, BSOAS, XII, 1948. " : Landlord and peasant in Persia, Oxford, 1953, p. 41); Kitāb al-hāwī li-l-a'māl al-sulṭāniya wa rusūm al-ḥisāb

- diwāniya (XIc. 前半) (米田° C. Cahen: Quelques problèmes économiques et fiscaux de l'Irāq Buyide d'après un traité de mathématiques, Annales de l'Institut d'Etudes Orientales d'Alger, X, 1952, p. 335).
- (2) 239H 年 dū l-qa'da 月 20 日 = 854.4.21 (新暦 25) に Nawrūz (Tab. VII, 372)° 268H 年 ramaḍān 月 22 日 = 882.4.14 (新暦 18) に Nawrūz (Tab. VIII, 100)°
- (3) A. Christensen: L'Iran sous les Sassanides, (Copenhagen, 1944), p. 168 以下。J. Markwart: Das Naurōz, seine Geschichte und seine Bedeutung, (Dr. Modi Memorial Vol. Papers on indo-iranian and other subjects, Bombay, 1930, pp. 709-65); A. Mez: Die Renaissance des Islāms, (Heidelberg, 1922), pp. 101-02.
- (4) 西暦月日は舊暦による。
- (5) Abū l-Ḥasan 'Alī b. al-Furāt° 296-99H' 304-06H' 311-12H の三回宰相になる。
- (6) 301-04H' 315-16H の二回宰相。306-11H 宰相補佐。
- (7) al-Mu'taḍid の改葬はこれまでの Nawrūz を採殺せず、宗教祭日として残してしたが、これは Nawrūz al-Furs とか Nawrūz al-awwal とか呼ばれ、319 H 年では rabī' al-awwal (III) 月 11 日 (931.4.2) であった (Arib 158)°
- (8) C. Cahen 氏によれば判讀不明。Maf. の murāfiqa' 'Alī b. 'Isā の豫算表の māḷ al-irtifaqāt に當ると思われる。
- (9) C. Cahen: Quelques problèmes économiques et fiscaux

de l'Irāq Buyide 所收翻譯による。

- (10) A. v. Kremer: Ueber das Einnahmehudget des Abbasiden-Reiches vom Jahre 306H. (918-919), (Denkschriften der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften, Wien, 1887), p. 307.

三 國家豫算表

アラビア語の 'amal (複數形: a'māl) は「業務」「職務」「職權」を意味し、特に「徴税業務」を指し、従つて「徴税單位」をあらわすこともある。一方この語は「書類一般」をも意味し、それが徴税業務に関するものであれば「豫算表」や單一業務に関する「報告書」を指す。このような豫算表が現れるのは第三期の特徴で、この節では豫算表の最終段階に當る國家豫算表について述べたい。というれば、第三期の當初に、

Ḥafīf al-Samarqandī⁽¹⁾ 云う。al-Mu'taḍid がカリフとなり、'Ubayd Allāh b. Sulaymān が宰相に選ばれたとき、カリフは彼に云つた。「すでに主權は亂れ、世界は荒廢している。私は然るべき支出や手當に充當するために諸徴税區 (nawāhi) の稅収を知りたい。そのため詳細な豫算表を作成し、それを私のところにもたせ。早急にかかれ」と。'Ubayd Allāh [b. Sulaymān] は

これを書記官や官廳の官吏達に話した。彼らは約束したが、その猶豫を求めた。…… (Hial 219)

とあつて、カリフにより豫算表の作成命令が出されている。これを聞いた拘禁中の Ibn al-Furāt 兄弟が豫算表作成に乗り出したが、その経緯についてはビラール所収 Abu l-Faḍl Muḥammad b. Ahmad b. 'Abd al-Hamid (287/900 没) の著書 *Abbar bulāḥ* Bani l-'Abbās 以下の引用文中に詳しく。カリフ al-Mu'tamid の弟で、執政の al-Muwaffaq の死直後、宰相 Isma'īl b. Bulbul とともにフル・サワード廳 (diwān al-Sawād = 稅務廳) を擔當してゐた Ibn al-Furāt 兄弟を逮捕せしめ、獄中にあつたが (Tab. VIII, 158) 兄の Ahmad b. al-Furāt がこの著者に、

「やあ Abu l-Faḍl へ、今や世界は云つてくせなほど荒廢し、諸金庫は空になつてゐる。しかも政務は新カリフに委ねられたばかりである。だが徵稅開始期までまだ時がある。私ならば毎日の首都 (即ち中央政府) の支出 (naḥaqāt) 7,000 dinār を領収と支拂の限界に應じて整へることにしよう。……」

と語り、これは宰相 Ubayd Allāh b. Sulaymān に傳へられ、宰相も al-Mu'tadid に、

「私は豫算表の知識をあまり持合せておりません。Ibn al-Furāt 兄弟はすでに徵稅業務や稅額のことを知つており、これ (豫算表) について必要な知識を持つております。」

と進言し、後述のような豫算表が作成されている (Hial 9-10)。この當時は第二期の軍閥相互の鬭争や二十年近くにわたるザンジュの叛亂から中央政府の直轄州というべきフル・サワード (al-Sawād: 低イラク) を回復したばかりであり、地方では小王朝が分立し、これを再征服する途上にあつた。それでこの著者が「俸餉は全面的に支給せねばならず、物資は不足し、資金は窮乏していた」(Hial 9) と述べているように財政は破産状態であり、その上「すべてに〔前宰相〕Isma'īl b. Bulbul はフル・サワードの jarāḥ 〔前宰相〕Isma'īl b. Bulbul はフル・サワードの jarāḥ を年に二年分徵収していた」(Hial 10) という有様で、またこれと連關してタバリーに、

……國庫 (bayt al-māl) の金が費されてしまつたとき、宰相 [Isma'īl b. Bulbul] は私領地の所有者 (arḥab al-diyār) に彼の土地から架空の年度 (sanat muḥanna) の jarāḥ を要求した。…… (Tab. VIII, 155-56)

とあるように、財政上の年度性は全く放棄されていた。従つてこのときの豫算表はこうした事態を收拾しよう作成

	項 目	給與月額 (dīnār)	同日数	日 額 (dīnār)	備 考
1	歩兵隊など al-nawba 令官吏俸給	30,000	[30]	1,000	門衛 (bawābin) で白人 700 dīnār 黒人 300 dīnār
2	親衛備兵隊 (gilmān al-haṣṣa) 俸給	60,000	60	1,000	al-Muwaffaq によつて解放され、 自由民の分隊に加入
3	al-Mu'taḍid の奴隷軍 隊俸給	135,000	90	1,500	al-Ḥuḡari 備兵隊
4	al-muhtār (選士)達の 俸給	42,000	70	600	あらゆる指揮官層から選ばれ、al- Muwaffaq, Buḡa, Musrūr, Bak- gūr, Ya'nis, Muḥliḥ Aḍkūtekin, Kayḡalaḡ, Kundāḡ らの奴隷
5	al-mutbat ならびに al-mumayyaz 騎兵隊 俸給	60,000	120	500	al-Gabal 諸部族を率いる Aḍar- bayḡān の長 Ibn Abi Dulaf の 指揮下
6	17種ある宮廷奉職 (ḥidmat al-dār) 被命 者俸給	3,300	30	110	私文書使、讀師、情報官、飛脚、 鼓手ら
7	Bagdād の治安令 (ra- sm al-ṣurta) 受給者 と代理官達	6,000	120	50	警吏 (arbā'), 武裝警備隊 (ma- ṣālih), 守衛、典獄、巡邏諸吏、税 關吏 (ma'ṣiri) ら
8	60日制奴隷備兵隊 (gilmān al-mamālik) 食糧費	9,000	[30]	300	高級宦官や指揮官が擔當軍區につ いて掌る
9	厨 房 費	10,000	"	333⅓	haṣṣa 用ならびに 'amma 用の 2厨房、製パン所経費、後宮およ び宮廷關係者食糧、黒人用製パン 所等経費
10	haṣṣa 用および 'amma 用調度費ほか	3,000	"	100	飲料手當費、衣裳、賞服、香料等 諸庫維持費、洗淨水、浴場用水、 鋸、胸當修繕費
11	水運搬者俸給	120	[30]	4	al-Qaṣr, 各倉庫、厨房、製パン所、 宮殿ほか用
12	親衛備兵ならびに奴隷 備兵俸給		50	167	自由民に加えられていない者
13	宮廷工人俸給	3,000	[30]	100	酌取、衣裳庫吏、金銀細工師、仕 立師、靴工、紙工ほか職人および 武器庫、鞍部庫の庫官と職人
14	後宮俸給	3,000	"	100	
15 a	馬 糧 費	12,000	"	400	haṣṣa 用、'amma 用、一般乗用 および運搬用、荷物運搬用騾馬、 Qaṣr al-Ṭin 付屬の5種の厩舎。 同關係者報酬を含む
15 b	種馬購入費	2,000	"	66⅔	
16	厨房係俸給	1,500	50	30	
17	庫官俸給	1,500	50	30	室内裝飾、家具、絨緞、蠟等諸庫。 助手、運搬者の報酬を含む
18	蠟、オリーブ油費	200	[30]	6 %	

	項 目	給與月額 (dīnār)	同日數	日 額 (dīnār)	備 考
19	馬具職人、驛遞馬係俸給	150	[30]	5	
20	宮友らの俸給	2,000	45	44⅓	
21	醫長ならびに助醫團俸給	700	[30]	23⅓	藥庫の藥費を含む
22	狩獵係俸給	2,500	35	70 [+1⅓]	隼匠、鷹匠、獵豹使い、狩師ら。餌費、諸道具係や勢子の給與を含む
23	各種船舶船員俸給	500	[30]	16⅔	早艇、輕運搬船、輜重船、遊覽船、輸送船等
24	燈 火 費	120	"	4	ナフサ・ランプ、燈用ナフサ油、燈芯等費および係の給與
25	義捐金 (ṣadaqa)			15	
26	al-Mutawakkil の子孫給費	1,000	[30]	33⅓	[補註] 第10代カリフ
27	カリフの子孫の嫡子給費	500	"	16⅔	當該カリフは al-Wāṭiq, al-Muhtadi, al-Mustaʿīn など
28	al-Muwaffaq の王子ら給費	500	"	"	ʿAbd al-Wahīd とその姉妹
29	al-Hašim 家の長老ら俸給	600	"	20	Bagdād のモスクの説教師、司祭らを含む
30	al-ʿAbbās 家, al-Ṭalib 家給費	1,000	"	33⅓	受給者 4,000人
31	宰相 ʿUbayd Allāh b. Sulaymān およびその子 al-Qāsim 俸給	1,500	"	33⅓ [+16⅔]	[補註] al-Qāsim 分が脱落
32	文官吏俸給および諸經費	4,700	"	156⅔	高等書記官、諸官廳官吏、文庫官、門衛、送達吏、下働きら。帳簿、巻紙、紙等費。ただし現金處理を行う機關の官吏を除く
33	裁判〔長〕官 Ishāq b. Ibrāhim および補佐官俸給	500	"	16⅔	10人の法理論家（顧問）給費を含む
34	モスク奉仕係給費	100	"	3⅓	モスク維持諸經費を含む
35	牢獄維持費	1,500	"	50	囚人の食物費、その他を含む
36	Bagdād 舟橋維持費	300	"	10	舟、綱費、橋係俸給など
37	al-Sāʿidi 病院維持費	450	"	15	諸科の醫師、助手、患者食費、藥代、飲物費など
	合 計			7,000	[正しくは 6,999 ² / ₂₁ dīnār]

[補註] 備考に當る部分は簡略にした。

されたもので、歳計規模も小さかった。残念ながらこの豫算年度の記述はないが、*Aḥmad b. al-Furāt* が宰相に、「宰相は *Aḥmad b. Muḥammad al-Ṭa'i* と私の弟 *ʿAlī b. Muḥammad [b. al-Furāt]* の伺候を命じ、私と彼らとで役頭をせればよい」と要請している (*Hiial* 10)。*Aḥmad b. Muḥammad al-Ṭa'i* はタバリー (*III*, 168)によれば、回暦二八一年 *ḡumādā l-ḡabira (IV)* 月二四日 (八九四・八・末) に死亡していることや前後の事情から回暦二八〇年度と推定することができる。この豫算表は歳出豫定の日額 7,000 *dīnār* に合せて歳入が協議されたが、歳入部門は総目しか残らず、歳出部門のみ細目があるが、まだアラビア語以外はどこにも紹介されていないので、やまとめて後者のみ表にした。この政令は二年間 (二八〇—八一年) 施行されている (*Hiial* 21-22)。

このほか少くとも史料の傳えるところを拾つてみると、ヒラール所収 *Ṭābit b. Sinān* によれば、

「私は彼 (*ʿAlī b. Ṭasā*) が三〇六年に全國の歳入と歳出のために作成した豫算表を読んだのち、……」(*Hiial* 323)

とある。この回暦三〇六年の豫算表は歳入部門のみの細目

が後世の寫本に残つてゐる。A. v. Kremer が Ueber das Einnahmebudget des Abbasiden-Reiches vom Jahre 306H. (918-919) に紹介している。三一九年 *raḡab (IV)* 月に宰相になつた (*Misk.* I, 212; *ʿArib* 161)

[*Abu l-Qasim*] *al-Kalwadāni* は彼にとつて必要な逼迫せる支出のための豫算表を作成し、また軍務廳と支出廳の各長官によつて別個に作られた豫算表の草稿 (*baṭi*) を得た。その必要額は彼の豫算表より 200,000 *dīnār* も多かった。……700,000 *dīnār* の缺損 (*ʿaḡz*) があつた (*Misk.* I, 217)。

また宰相 *al-Ḥusayn b. al-Qasim* によつて三二〇年度の豫算表が作成されているが、これについては後述する。スリーリーの三二九年の條には、

「大總督 (*Baḡkam*) は諸々の徴税區における税收のための諸豫算表を作成させるために書記官達を召集した。しかしこれは計略であつた。……」(*Sul* 147)

とあつて、この年に實際に豫算表が作成されたかどうかは別として、大總督時代でも豫算が原則になつてゐる。このように第三期では宰相もしくはその補佐官は豫算表の知識を持つことが必須とされている。ところが第一、第二期では決算書とも云うべき *ḥisāb* (計算書) の作成が重要視さ

れている。タバリー (VII, 234) によれば、Samarra 建設當時のことで、宰相の決算に不正があつたらしく、

〔回曆二二〇年(八三五)〕safar (II) 月 al-Mu'asim は al-Qa-ti' に到着したとき「(宰相) al-Fadi b. Marwān とその一族に對して立腹し、彼らの手づ出納された額を提示することを命じ、al-Fadi を軟禁した。彼の計算書の作成 (ʿamal) に關して怒を蒙つたのであつた。……

とあつて、計算書の作成は慣例となつており、これは地方政府の中央政府に對する關係でも同じであつた。第二代カリフ al-Manṣūr が al-Mahdī を皇太子として al-Rayy の總督に任じてゐたとき、

彼 (al-Mahdī) の書記 Abū 'Ubayd Allāh じ [al-Rayy の] 公庫 (bayt al-mal) における支出と管理を許さうとした。彼は al-Mahdī と長く間 al-Rayy に滞在し、巨額の金を支出した。al-Mahdī が首都に歸任したとき、al-Manṣūr は Abū 'Ubayd Allāh じ彼の手づ出納されたものについて計算書の提出を要求した。…… (Gans. 127)

と伝えられているように、これらはいずれも事後承諾を中央政府もしくはカリフに求めるだけであつて、まだ計畫財政とは云いがたい。またよく知られている Harūn al-Rasīd 時代の歳入の taqdīr (見積) 書は収支の均衡を考慮し

て作成されたものでなく、その手續も不明確である。第二期半ではタバリーの回曆二五二二年の條に、

トルコ兵、マグリブ兵、一般傭兵らの俸給はこの年に年間必要額が 200,000,000 dinār に達した。これは全帝國の租税の二年分に當る (Tab. VII, 512)。

とあり、數字はともかく、財政の計畫性は全く認められない。

次に國家豫算表の編制手續とその審議について述べたい。二八〇年度の場合ではヒラール所収 Abū l-Fadi b. 'Abd al-Ḥamid によれば、

Abū l-'Abbās [Aḥmad b. al-Furāt] じ Abū l-Ḥasan [ʿAlī b. al-Furāt] は釋放せられ [Aḥmad b. Muḥammad] al-Ṭā'i じ al-Kufā' al-Qasr' Bārūsā l-Aḥlā' 同 al-Asfal 等々が係る徵稅業務を彼に請負させることについて議論し…… (Hijāl 10)

とあつて、一徵稅請負人 (dāmin) との協議のみで作成されているが、これはむしろ異例といふべきで、通例はやはり下級機關が作成した各種の豫算表を綜合した。回曆二一五年、ʿAlī b. ʿIsa は第二次宰相着任 (ʿArīb 129; Misk. I, 151; Hijāl 310) 後、ただちに「諸種豫算表をまとめた (Misk. I, 151)」が、ヒラール (311-12) によれば、その基

礎資料として特に徴税請負人達の徴税請負 (qamānāt al-dūmanā) の情況を知るため、反対派の元宰相 Ibn al-Furāt に属していた書記官 Ḥisām b. 'Abd Allāh の協力を求めている。彼はその内容を詳細に説明してから、

「……私はすでに現金化可能 (a'yan) の彼らの證券 (ḥuṭūt: ḥait' の複数形) と彼らの負債額、送金済額ならびに政務内容を付記した科料者證券の残額等の總目 (usūl) を記した豫算表とそれらの一項目毎の残額に關して細目を付した (mufaṣṣal) 豫算表を準備して來ている。これらはすべて領収すべきものであります」と云った。'Alī b. 'Isa はその證券を確かめるため、インク官に渡すよう命じ、二つの豫算表は受取つて讀んだ。……

とあつて、むしろ異例の資料蒐集も行つた。

'Alī b. 'Isa は弟 'Abd al-Rahman と Sulaymān b. al-Ḥasan に諸官廳の官吏達 (もしくは長官達) が提出する徴税請負人や稅務官達に係る諸種豫算表の綜合 (fi 'amal min al-a'māl) ……などについて助力を求め、彼らは確約した (Ḥilāl 313)。

とあるように、宰相およびその専門官との間で豫算表の綜合が行われている。また回曆三二〇年 rabī' al-aḥir (IV) 月における三二〇會計年度の國家豫算表作成について次のような記事がある。

〔宰相〕 al-Ḥusayn b. al-Qasim は總務系 (al-usūl) ならびに

監査系 (al-azimma: zimām の複数形) 諸官廳長官達の有効性のある草稿——これらには諸徴稅區の「確實な」稅収も、その收納が危ぶまれるものも含まれていたが——を得て諸豫算表を綜合したが、「歲」出をなるべく「歲」入に近いように見積つていた。……〔カリフ〕 al-Muqtadir はこの豫算表を「最高監査廳長官」 al-Ḥasibī に渡して逐次調査するよう命じた。 al-Ḥasibī は al-Ḥusayn b. al-Qasim が欺瞞行爲を犯していることを發見した。即ち諸徴稅區よりの收納見込額に、すでに政府の手を離れてしまつた……のような諸徴稅區の税金を加へ、……〔歲〕出の項から軍隊、側近らに對して彼自ら増給した増額分を削り、收納見込額から賈却濟の私領地の稅収を削除していなかつた。 al-Ḥasibī は報告書を作成し al-Muqtadir に提出した。……(Misk. I, 226—27)

このときの豫算表は宰相が自己の政治的地位を安泰にするため、收入項目を故意に多く見積つたり、必要な支出を隠したりして、歳入および歳出の最終總額が相等しいにすぎない豫算の單なる形式的均衡を意圖したいわゆる紙上均衡のみの豫算であつて、最高監査 (dawāwin al-azimma) 廳長官に見破られたわけであるが、これを確定するようカリフの命令で全書記官が召集され、會議における宰相と最高監査廳長官の對論審議の結果、宰相の敗北となり、免職さ

せられている。これによると豫算に對する承認權がカリフよりむしろ書記官らの官僚の會議にあることが認められる。特に監査系官廳や最高監査廳の役割は注目に値いする。このときでは宰相の年度獨立性の無視から財政は亂れ、

Hārūn b. Ġarīb (al-Muqtadir) は財政を建直するため al-Muqtadir が諸官廳監査職 (azimmat al-dawāwin) を直接授任し、(宰相) al-Husayn は總務系諸官廳 (dawāwin al-usul) のみを擔當させるよう進言した。…… al-Ḥašibī が最高監査 (dawāwin al-azimma) を授けられた (Misk. I, 226)。

とあるから、最高監査廳は豫算の立案ならびに執行を行う宰相とは獨立して、純然たる財政監督特に歲計監督を行っている。この監査廳は第三代カリフ al-Mahdi が回曆一六二(七七七八)年に創設したもので、Irağ 稅務監査廳のほか數種の監査廳があつたと考えられる (Tab. VI, 373; Ġahš. 146)。(6) 回曆一六八年には更にこれらを總括する最高監査廳 (diwān zimām al-azimma) が設けられたが (Tab. VI, 391; Ġahš. 166) これは「全監査廳の上に立つ監査を執行する場合、dawāwin al-azimma (最高監査) を擔當し、すべての監査廳にある人物を任命する。……」とあるように、しばしば職權を意味する dawāwin al-azimma

という表現が用いられる。この創設の動機を示す直接の資料はないが、第一、第二期では歲計監督よりもむしろ多分に官吏の監察に重點が置かれており、當該總務系 (asul) 官廳の權力を牽制したと思われる (Tab. VI, 440-41; VII, 233-34; Ġahš. 167, 168, 179)。(7) 要するに業務の執行を監督するわけで、回曆三二〇年の例から總務系官廳が作成した豫算表に當該監査系官廳の連署もしくは付屬書類を付ける歲計の事前監督を行つている。ただこの監査廳が嚴密な意味での會計検査即ち事後監督を行つていたかどうかは資料の點から明らかにしがたい。

さてこのようにして承認された豫算の執行についてであるが、ʿAlī b. ʿĪsā の第二次宰相時代に關する記述の中にややその例を見ることができ、回曆三一五(九二七)年、彼が宰相に就任したとき、財政は逼迫し、豫算執行に強行手段を取らねばならなかつた。ミスカワイフは次のように記している。

彼は Ibrahim b. Ayyūb に彼のもとの金錢業務の記帳 (ḥiṣāb) 毎日出納すべき額についての國庫長官 (ṣāhib bayt al-māl) の指示および支出濟額、收納濟額、殘高をできるだけ早く知るため、その日々出納簿 (ruḥamagāt) を毎週提出することを依頼した。

慣例では終印書^(ハトウヤ) (batma) が作成されてから、當該月の日々出納簿が當該官廳に提出されるのは翌月の十五日であつた (Misk. I, 151-52)。

これによれば、豫算の執行にあつて特別の官吏が任命され、この専門官を通じて現金處理を行う國庫長官に出納命令が發せられている。⁽⁸⁾そして支出と收納の實績額がその殘高とともに出納簿に繼續的に記帳される。終印書とはホヰリスミーでは、

^(ハトウヤ) batma は貨幣取扱吏^(ウツラフス) (gabhad) が毎月收納〔濟〕額^(istiḥṣāḡ)とその合計ならびに支出〔濟〕額^(nafaqat)とその合計を記して提出する書類である (Mat. 37)。

ともあるように、いわば月期末締切書であつて、これと日々出納簿とで豫算の實績を確定するため、通常一ヶ月毎の特別な決算を行い、豫算狀況に關する監督を行つた。その際恐らく事後記帳のために當該書類の提出に約半月の猶豫が認められていたが、三一五年では事後記帳はおろか、特別決算も一週間毎とするほど緊迫していたと考えられる。

以上のような豫算技術を持つてゐるアッバース朝の國家豫算表の性格について觸れておきたい。まず歳入面について回曆三〇六年の豫算表を見ると、中央直轄州であるア

ル・サワードに關してはバスラの船舶稅 (marakib) 、バグダード、Samarra^(サマラー) Wasir^(ワースィール)、バスラ、クーフアの五大都市における羊市場稅、同じく五大都市の造幣局收入、バグダードの人頭稅⁽⁹⁾、その他などが豫算に計上されているが、地方からの收入では特例を除き、⁽¹⁰⁾ ⁽¹¹⁾ ⁽¹²⁾ ⁽¹³⁾ ⁽¹⁴⁾ ⁽¹⁵⁾ ⁽¹⁶⁾ ⁽¹⁷⁾ ⁽¹⁸⁾ ⁽¹⁹⁾ ⁽²⁰⁾ ⁽²¹⁾ ⁽²²⁾ ⁽²³⁾ ⁽²⁴⁾ ⁽²⁵⁾ ⁽²⁶⁾ ⁽²⁷⁾ ⁽²⁸⁾ ⁽²⁹⁾ ⁽³⁰⁾ ⁽³¹⁾ ⁽³²⁾ ⁽³³⁾ ⁽³⁴⁾ ⁽³⁵⁾ ⁽³⁶⁾ ⁽³⁷⁾ ⁽³⁸⁾ ⁽³⁹⁾ ⁽⁴⁰⁾ ⁽⁴¹⁾ ⁽⁴²⁾ ⁽⁴³⁾ ⁽⁴⁴⁾ ⁽⁴⁵⁾ ⁽⁴⁶⁾ ⁽⁴⁷⁾ ⁽⁴⁸⁾ ⁽⁴⁹⁾ ⁽⁵⁰⁾ ⁽⁵¹⁾ ⁽⁵²⁾ ⁽⁵³⁾ ⁽⁵⁴⁾ ⁽⁵⁵⁾ ⁽⁵⁶⁾ ⁽⁵⁷⁾ ⁽⁵⁸⁾ ⁽⁵⁹⁾ ⁽⁶⁰⁾ ⁽⁶¹⁾ ⁽⁶²⁾ ⁽⁶³⁾ ⁽⁶⁴⁾ ⁽⁶⁵⁾ ⁽⁶⁶⁾ ⁽⁶⁷⁾ ⁽⁶⁸⁾ ⁽⁶⁹⁾ ⁽⁷⁰⁾ ⁽⁷¹⁾ ⁽⁷²⁾ ⁽⁷³⁾ ⁽⁷⁴⁾ ⁽⁷⁵⁾ ⁽⁷⁶⁾ ⁽⁷⁷⁾ ⁽⁷⁸⁾ ⁽⁷⁹⁾ ⁽⁸⁰⁾ ⁽⁸¹⁾ ⁽⁸²⁾ ⁽⁸³⁾ ⁽⁸⁴⁾ ⁽⁸⁵⁾ ⁽⁸⁶⁾ ⁽⁸⁷⁾ ⁽⁸⁸⁾ ⁽⁸⁹⁾ ⁽⁹⁰⁾ ⁽⁹¹⁾ ⁽⁹²⁾ ⁽⁹³⁾ ⁽⁹⁴⁾ ⁽⁹⁵⁾ ⁽⁹⁶⁾ ⁽⁹⁷⁾ ⁽⁹⁸⁾ ⁽⁹⁹⁾ ⁽¹⁰⁰⁾ ⁽¹⁰¹⁾ ⁽¹⁰²⁾ ⁽¹⁰³⁾ ⁽¹⁰⁴⁾ ⁽¹⁰⁵⁾ ⁽¹⁰⁶⁾ ⁽¹⁰⁷⁾ ⁽¹⁰⁸⁾ ⁽¹⁰⁹⁾ ⁽¹¹⁰⁾ ⁽¹¹¹⁾ ⁽¹¹²⁾ ⁽¹¹³⁾ ⁽¹¹⁴⁾ ⁽¹¹⁵⁾ ⁽¹¹⁶⁾ ⁽¹¹⁷⁾ ⁽¹¹⁸⁾ ⁽¹¹⁹⁾ ⁽¹²⁰⁾ ⁽¹²¹⁾ ⁽¹²²⁾ ⁽¹²³⁾ ⁽¹²⁴⁾ ⁽¹²⁵⁾ ⁽¹²⁶⁾ ⁽¹²⁷⁾ ⁽¹²⁸⁾ ⁽¹²⁹⁾ ⁽¹³⁰⁾ ⁽¹³¹⁾ ⁽¹³²⁾ ⁽¹³³⁾ ⁽¹³⁴⁾ ⁽¹³⁵⁾ ⁽¹³⁶⁾ ⁽¹³⁷⁾ ⁽¹³⁸⁾ ⁽¹³⁹⁾ ⁽¹⁴⁰⁾ ⁽¹⁴¹⁾ ⁽¹⁴²⁾ ⁽¹⁴³⁾ ⁽¹⁴⁴⁾ ⁽¹⁴⁵⁾ ⁽¹⁴⁶⁾ ⁽¹⁴⁷⁾ ⁽¹⁴⁸⁾ ⁽¹⁴⁹⁾ ⁽¹⁵⁰⁾ ⁽¹⁵¹⁾ ⁽¹⁵²⁾ ⁽¹⁵³⁾ ⁽¹⁵⁴⁾ ⁽¹⁵⁵⁾ ⁽¹⁵⁶⁾ ⁽¹⁵⁷⁾ ⁽¹⁵⁸⁾ ⁽¹⁵⁹⁾ ⁽¹⁶⁰⁾ ⁽¹⁶¹⁾ ⁽¹⁶²⁾ ⁽¹⁶³⁾ ⁽¹⁶⁴⁾ ⁽¹⁶⁵⁾ ⁽¹⁶⁶⁾ ⁽¹⁶⁷⁾ ⁽¹⁶⁸⁾ ⁽¹⁶⁹⁾ ⁽¹⁷⁰⁾ ⁽¹⁷¹⁾ ⁽¹⁷²⁾ ⁽¹⁷³⁾ ⁽¹⁷⁴⁾ ⁽¹⁷⁵⁾ ⁽¹⁷⁶⁾ ⁽¹⁷⁷⁾ ⁽¹⁷⁸⁾ ⁽¹⁷⁹⁾ ⁽¹⁸⁰⁾ ⁽¹⁸¹⁾ ⁽¹⁸²⁾ ⁽¹⁸³⁾ ⁽¹⁸⁴⁾ ⁽¹⁸⁵⁾ ⁽¹⁸⁶⁾ ⁽¹⁸⁷⁾ ⁽¹⁸⁸⁾ ⁽¹⁸⁹⁾ ⁽¹⁹⁰⁾ ⁽¹⁹¹⁾ ⁽¹⁹²⁾ ⁽¹⁹³⁾ ⁽¹⁹⁴⁾ ⁽¹⁹⁵⁾ ⁽¹⁹⁶⁾ ⁽¹⁹⁷⁾ ⁽¹⁹⁸⁾ ⁽¹⁹⁹⁾ ⁽²⁰⁰⁾ ⁽²⁰¹⁾ ⁽²⁰²⁾ ⁽²⁰³⁾ ⁽²⁰⁴⁾ ⁽²⁰⁵⁾ ⁽²⁰⁶⁾ ⁽²⁰⁷⁾ ⁽²⁰⁸⁾ ⁽²⁰⁹⁾ ⁽²¹⁰⁾ ⁽²¹¹⁾ ⁽²¹²⁾ ⁽²¹³⁾ ⁽²¹⁴⁾ ⁽²¹⁵⁾ ⁽²¹⁶⁾ ⁽²¹⁷⁾ ⁽²¹⁸⁾ ⁽²¹⁹⁾ ⁽²²⁰⁾ ⁽²²¹⁾ ⁽²²²⁾ ⁽²²³⁾ ⁽²²⁴⁾ ⁽²²⁵⁾ ⁽²²⁶⁾ ⁽²²⁷⁾ ⁽²²⁸⁾ ⁽²²⁹⁾ ⁽²³⁰⁾ ⁽²³¹⁾ ⁽²³²⁾ ⁽²³³⁾ ⁽²³⁴⁾ ⁽²³⁵⁾ ⁽²³⁶⁾ ⁽²³⁷⁾ ⁽²³⁸⁾ ⁽²³⁹⁾ ⁽²⁴⁰⁾ ⁽²⁴¹⁾ ⁽²⁴²⁾ ⁽²⁴³⁾ ⁽²⁴⁴⁾ ⁽²⁴⁵⁾ ⁽²⁴⁶⁾ ⁽²⁴⁷⁾ ⁽²⁴⁸⁾ ⁽²⁴⁹⁾ ⁽²⁵⁰⁾ ⁽²⁵¹⁾ ⁽²⁵²⁾ ⁽²⁵³⁾ ⁽²⁵⁴⁾ ⁽²⁵⁵⁾ ⁽²⁵⁶⁾ ⁽²⁵⁷⁾ ⁽²⁵⁸⁾ ⁽²⁵⁹⁾ ⁽²⁶⁰⁾ ⁽²⁶¹⁾ ⁽²⁶²⁾ ⁽²⁶³⁾ ⁽²⁶⁴⁾ ⁽²⁶⁵⁾ ⁽²⁶⁶⁾ ⁽²⁶⁷⁾ ⁽²⁶⁸⁾ ⁽²⁶⁹⁾ ⁽²⁷⁰⁾ ⁽²⁷¹⁾ ⁽²⁷²⁾ ⁽²⁷³⁾ ⁽²⁷⁴⁾ ⁽²⁷⁵⁾ ⁽²⁷⁶⁾ ⁽²⁷⁷⁾ ⁽²⁷⁸⁾ ⁽²⁷⁹⁾ ⁽²⁸⁰⁾ ⁽²⁸¹⁾ ⁽²⁸²⁾ ⁽²⁸³⁾ ⁽²⁸⁴⁾ ⁽²⁸⁵⁾ ⁽²⁸⁶⁾ ⁽²⁸⁷⁾ ⁽²⁸⁸⁾ ⁽²⁸⁹⁾ ⁽²⁹⁰⁾ ⁽²⁹¹⁾ ⁽²⁹²⁾ ⁽²⁹³⁾ ⁽²⁹⁴⁾ ⁽²⁹⁵⁾ ⁽²⁹⁶⁾ ⁽²⁹⁷⁾ ⁽²⁹⁸⁾ ⁽²⁹⁹⁾ ⁽³⁰⁰⁾ ⁽³⁰¹⁾ ⁽³⁰²⁾ ⁽³⁰³⁾ ⁽³⁰⁴⁾ ⁽³⁰⁵⁾ ⁽³⁰⁶⁾ ⁽³⁰⁷⁾ ⁽³⁰⁸⁾ ⁽³⁰⁹⁾ ⁽³¹⁰⁾ ⁽³¹¹⁾ ⁽³¹²⁾ ⁽³¹³⁾ ⁽³¹⁴⁾ ⁽³¹⁵⁾ ⁽³¹⁶⁾ ⁽³¹⁷⁾ ⁽³¹⁸⁾ ⁽³¹⁹⁾ ⁽³²⁰⁾ ⁽³²¹⁾ ⁽³²²⁾ ⁽³²³⁾ ⁽³²⁴⁾ ⁽³²⁵⁾ ⁽³²⁶⁾ ⁽³²⁷⁾ ⁽³²⁸⁾ ⁽³²⁹⁾ ⁽³³⁰⁾ ⁽³³¹⁾ ⁽³³²⁾ ⁽³³³⁾ ⁽³³⁴⁾ ⁽³³⁵⁾ ⁽³³⁶⁾ ⁽³³⁷⁾ ⁽³³⁸⁾ ⁽³³⁹⁾ ⁽³⁴⁰⁾ ⁽³⁴¹⁾ ⁽³⁴²⁾ ⁽³⁴³⁾ ⁽³⁴⁴⁾ ⁽³⁴⁵⁾ ⁽³⁴⁶⁾ ⁽³⁴⁷⁾ ⁽³⁴⁸⁾ ⁽³⁴⁹⁾ ⁽³⁵⁰⁾ ⁽³⁵¹⁾ ⁽³⁵²⁾ ⁽³⁵³⁾ ⁽³⁵⁴⁾ ⁽³⁵⁵⁾ ⁽³⁵⁶⁾ ⁽³⁵⁷⁾ ⁽³⁵⁸⁾ ⁽³⁵⁹⁾ ⁽³⁶⁰⁾ ⁽³⁶¹⁾ ⁽³⁶²⁾ ⁽³⁶³⁾ ⁽³⁶⁴⁾ ⁽³⁶⁵⁾ ⁽³⁶⁶⁾ ⁽³⁶⁷⁾ ⁽³⁶⁸⁾ ⁽³⁶⁹⁾ ⁽³⁷⁰⁾ ⁽³⁷¹⁾ ⁽³⁷²⁾ ⁽³⁷³⁾ ⁽³⁷⁴⁾ ⁽³⁷⁵⁾ ⁽³⁷⁶⁾ ⁽³⁷⁷⁾ ⁽³⁷⁸⁾ ⁽³⁷⁹⁾ ⁽³⁸⁰⁾ ⁽³⁸¹⁾ ⁽³⁸²⁾ ⁽³⁸³⁾ ⁽³⁸⁴⁾ ⁽³⁸⁵⁾ ⁽³⁸⁶⁾ ⁽³⁸⁷⁾ ⁽³⁸⁸⁾ ⁽³⁸⁹⁾ ⁽³⁹⁰⁾ ⁽³⁹¹⁾ ⁽³⁹²⁾ ⁽³⁹³⁾ ⁽³⁹⁴⁾ ⁽³⁹⁵⁾ ⁽³⁹⁶⁾ ⁽³⁹⁷⁾ ⁽³⁹⁸⁾ ⁽³⁹⁹⁾ ⁽⁴⁰⁰⁾ ⁽⁴⁰¹⁾ ⁽⁴⁰²⁾ ⁽⁴⁰³⁾ ⁽⁴⁰⁴⁾ ⁽⁴⁰⁵⁾ ⁽⁴⁰⁶⁾ ⁽⁴⁰⁷⁾ ⁽⁴⁰⁸⁾ ⁽⁴⁰⁹⁾ ⁽⁴¹⁰⁾ ⁽⁴¹¹⁾ ⁽⁴¹²⁾ ⁽⁴¹³⁾ ⁽⁴¹⁴⁾ ⁽⁴¹⁵⁾ ⁽⁴¹⁶⁾ ⁽⁴¹⁷⁾ ⁽⁴¹⁸⁾ ⁽⁴¹⁹⁾ ⁽⁴²⁰⁾ ⁽⁴²¹⁾ ⁽⁴²²⁾ ⁽⁴²³⁾ ⁽⁴²⁴⁾ ⁽⁴²⁵⁾ ⁽⁴²⁶⁾ ⁽⁴²⁷⁾ ⁽⁴²⁸⁾ ⁽⁴²⁹⁾ ⁽⁴³⁰⁾ ⁽⁴³¹⁾ ⁽⁴³²⁾ ⁽⁴³³⁾ ⁽⁴³⁴⁾ ⁽⁴³⁵⁾ ⁽⁴³⁶⁾ ⁽⁴³⁷⁾ ⁽⁴³⁸⁾ ⁽⁴³⁹⁾ ⁽⁴⁴⁰⁾ ⁽⁴⁴¹⁾ ⁽⁴⁴²⁾ ⁽⁴⁴³⁾ ⁽⁴⁴⁴⁾ ⁽⁴⁴⁵⁾ ⁽⁴⁴⁶⁾ ⁽⁴⁴⁷⁾ ⁽⁴⁴⁸⁾ ⁽⁴⁴⁹⁾ ⁽⁴⁵⁰⁾ ⁽⁴⁵¹⁾ ⁽⁴⁵²⁾ ⁽⁴⁵³⁾ ⁽⁴⁵⁴⁾ ⁽⁴⁵⁵⁾ ⁽⁴⁵⁶⁾ ⁽⁴⁵⁷⁾ ⁽⁴⁵⁸⁾ ⁽⁴⁵⁹⁾ ⁽⁴⁶⁰⁾ ⁽⁴⁶¹⁾ ⁽⁴⁶²⁾ ⁽⁴⁶³⁾ ⁽⁴⁶⁴⁾ ⁽⁴⁶⁵⁾ ⁽⁴⁶⁶⁾ ⁽⁴⁶⁷⁾ ⁽⁴⁶⁸⁾ ⁽⁴⁶⁹⁾ ⁽⁴⁷⁰⁾ ⁽⁴⁷¹⁾ ⁽⁴⁷²⁾ ⁽⁴⁷³⁾ ⁽⁴⁷⁴⁾ ⁽⁴⁷⁵⁾ ⁽⁴⁷⁶⁾ ⁽⁴⁷⁷⁾ ⁽⁴⁷⁸⁾ ⁽⁴⁷⁹⁾ ⁽⁴⁸⁰⁾ ⁽⁴⁸¹⁾ ⁽⁴⁸²⁾ ⁽⁴⁸³⁾ ⁽⁴⁸⁴⁾ ⁽⁴⁸⁵⁾ ⁽⁴⁸⁶⁾ ⁽⁴⁸⁷⁾ ⁽⁴⁸⁸⁾ ⁽⁴⁸⁹⁾ ⁽⁴⁹⁰⁾ ⁽⁴⁹¹⁾ ⁽⁴⁹²⁾ ⁽⁴⁹³⁾ ⁽⁴⁹⁴⁾ ⁽⁴⁹⁵⁾ ⁽⁴⁹⁶⁾ ⁽⁴⁹⁷⁾ ⁽⁴⁹⁸⁾ ⁽⁴⁹⁹⁾ ⁽⁵⁰⁰⁾ ⁽⁵⁰¹⁾ ⁽⁵⁰²⁾ ⁽⁵⁰³⁾ ⁽⁵⁰⁴⁾ ⁽⁵⁰⁵⁾ ⁽⁵⁰⁶⁾ ⁽⁵⁰⁷⁾ ⁽⁵⁰⁸⁾ ⁽⁵⁰⁹⁾ ⁽⁵¹⁰⁾ ⁽⁵¹¹⁾ ⁽⁵¹²⁾ ⁽⁵¹³⁾ ⁽⁵¹⁴⁾ ⁽⁵¹⁵⁾ ⁽⁵¹⁶⁾ ⁽⁵¹⁷⁾ ⁽⁵¹⁸⁾ ⁽⁵¹⁹⁾ ⁽⁵²⁰⁾ ⁽⁵²¹⁾ ⁽⁵²²⁾ ⁽⁵²³⁾ ⁽⁵²⁴⁾ ⁽⁵²⁵⁾ ⁽⁵²⁶⁾ ⁽⁵²⁷⁾ ⁽⁵²⁸⁾ ⁽⁵²⁹⁾ ⁽⁵³⁰⁾ ⁽⁵³¹⁾ ⁽⁵³²⁾ ⁽⁵³³⁾ ⁽⁵³⁴⁾ ⁽⁵³⁵⁾ ⁽⁵³⁶⁾ ⁽⁵³⁷⁾ ⁽⁵³⁸⁾ ⁽⁵³⁹⁾ ⁽⁵⁴⁰⁾ ⁽⁵⁴¹⁾ ⁽⁵⁴²⁾ ⁽⁵⁴³⁾ ⁽⁵⁴⁴⁾ ⁽⁵⁴⁵⁾ ⁽⁵⁴⁶⁾ ⁽⁵⁴⁷⁾ ⁽⁵⁴⁸⁾ ⁽⁵⁴⁹⁾ ⁽⁵⁵⁰⁾ ⁽⁵⁵¹⁾ ⁽⁵⁵²⁾ ⁽⁵⁵³⁾ ⁽⁵⁵⁴⁾ ⁽⁵⁵⁵⁾ ⁽⁵⁵⁶⁾ ⁽⁵⁵⁷⁾ ⁽⁵⁵⁸⁾ ⁽⁵⁵⁹⁾ ⁽⁵⁶⁰⁾ ⁽⁵⁶¹⁾ ⁽⁵⁶²⁾ ⁽⁵⁶³⁾ ⁽⁵⁶⁴⁾ ⁽⁵⁶⁵⁾ ⁽⁵⁶⁶⁾ ⁽⁵⁶⁷⁾ ⁽⁵⁶⁸⁾ ⁽⁵⁶⁹⁾ ⁽⁵⁷⁰⁾ ⁽⁵⁷¹⁾ ⁽⁵⁷²⁾ ⁽⁵⁷³⁾ ⁽⁵⁷⁴⁾ ⁽⁵⁷⁵⁾ ⁽⁵⁷⁶⁾ ⁽⁵⁷⁷⁾ ⁽⁵⁷⁸⁾ ⁽⁵⁷⁹⁾ ⁽⁵⁸⁰⁾ ⁽⁵⁸¹⁾ ⁽⁵⁸²⁾ ⁽⁵⁸³⁾ ⁽⁵⁸⁴⁾ ⁽⁵⁸⁵⁾ ⁽⁵⁸⁶⁾ ⁽⁵⁸⁷⁾ ⁽⁵⁸⁸⁾ ⁽⁵⁸⁹⁾ ⁽⁵⁹⁰⁾ ⁽⁵⁹¹⁾ ⁽⁵⁹²⁾ ⁽⁵⁹³⁾ ⁽⁵⁹⁴⁾ ⁽⁵⁹⁵⁾ ⁽⁵⁹⁶⁾ ⁽⁵⁹⁷⁾ ⁽⁵⁹⁸⁾ ⁽⁵⁹⁹⁾ ⁽⁶⁰⁰⁾ ⁽⁶⁰¹⁾ ⁽⁶⁰²⁾ ⁽⁶⁰³⁾ ⁽⁶⁰⁴⁾ ⁽⁶⁰⁵⁾ ⁽⁶⁰⁶⁾ ⁽⁶⁰⁷⁾ ⁽⁶⁰⁸⁾ ⁽⁶⁰⁹⁾ ⁽⁶¹⁰⁾ ⁽⁶¹¹⁾ ⁽⁶¹²⁾ ⁽⁶¹³⁾ ⁽⁶¹⁴⁾ ⁽⁶¹⁵⁾ ⁽⁶¹⁶⁾ ⁽⁶¹⁷⁾ ⁽⁶¹⁸⁾ ⁽⁶¹⁹⁾ ⁽⁶²⁰⁾ ⁽⁶²¹⁾ ⁽⁶²²⁾ ⁽⁶²³⁾ ⁽⁶²⁴⁾ ⁽⁶²⁵⁾ ⁽⁶²⁶⁾ ⁽⁶²⁷⁾ ⁽⁶²⁸⁾ ⁽⁶²⁹⁾ ⁽⁶³⁰⁾ ⁽⁶³¹⁾ ⁽⁶³²⁾ ⁽⁶³³⁾ ⁽⁶³⁴⁾ ⁽⁶³⁵⁾ ⁽⁶³⁶⁾ ⁽⁶³⁷⁾ ⁽⁶³⁸⁾ ⁽⁶³⁹⁾ ⁽⁶⁴⁰⁾ ⁽⁶⁴¹⁾ ⁽⁶⁴²⁾ ⁽⁶⁴³⁾ ⁽⁶⁴⁴⁾ ⁽⁶⁴⁵⁾ ⁽⁶⁴⁶⁾ ⁽⁶⁴⁷⁾ ⁽⁶⁴⁸⁾ ⁽⁶⁴⁹⁾ ⁽⁶⁵⁰⁾ ⁽⁶⁵¹⁾ ⁽⁶⁵²⁾ ⁽⁶⁵³⁾ ⁽⁶⁵⁴⁾ ⁽⁶⁵⁵⁾ ⁽⁶⁵⁶⁾ ⁽⁶⁵⁷⁾ ⁽⁶⁵⁸⁾ ⁽⁶⁵⁹⁾ ⁽⁶⁶⁰⁾ ⁽⁶⁶¹⁾ ⁽⁶⁶²⁾ ⁽⁶⁶³⁾ ⁽⁶⁶⁴⁾ ⁽⁶⁶⁵⁾ ⁽⁶⁶⁶⁾ ⁽⁶⁶⁷⁾ ⁽⁶⁶⁸⁾ ⁽⁶⁶⁹⁾ ⁽⁶⁷⁰⁾ ⁽⁶⁷¹⁾ ⁽⁶⁷²⁾ ⁽⁶⁷³⁾ ⁽⁶⁷⁴⁾ ⁽⁶⁷⁵⁾ ⁽⁶⁷⁶⁾ ⁽⁶⁷⁷⁾ ⁽⁶⁷⁸⁾ ⁽⁶⁷⁹⁾ ⁽⁶⁸⁰⁾ ⁽⁶⁸¹⁾ ⁽⁶⁸²⁾ ⁽⁶⁸³⁾ ⁽⁶⁸⁴⁾ ⁽⁶⁸⁵⁾ ⁽⁶⁸⁶⁾ ⁽⁶⁸⁷⁾ ⁽⁶⁸⁸⁾ ⁽⁶⁸⁹⁾ ⁽⁶⁹⁰⁾ ⁽⁶⁹¹⁾ ⁽⁶⁹²⁾ ⁽⁶⁹³⁾ ⁽⁶⁹⁴⁾ ⁽⁶⁹⁵⁾ ⁽⁶⁹⁶⁾ ⁽⁶⁹⁷⁾ ⁽⁶⁹⁸⁾ ⁽⁶⁹⁹⁾ ⁽⁷⁰⁰⁾ ⁽⁷⁰¹⁾ ⁽⁷⁰²⁾ ⁽⁷⁰³⁾ ⁽⁷⁰⁴⁾ ⁽⁷⁰⁵⁾ ⁽⁷⁰⁶⁾ ⁽⁷⁰⁷⁾ ⁽⁷⁰⁸⁾ ⁽⁷⁰⁹⁾ ⁽⁷¹⁰⁾ ⁽⁷¹¹⁾ ⁽⁷¹²⁾ ⁽⁷¹³⁾ ⁽⁷¹⁴⁾ ⁽⁷¹⁵⁾ ⁽⁷¹⁶⁾ ⁽⁷¹⁷⁾ ⁽⁷¹⁸⁾ ⁽⁷¹⁹⁾ ⁽⁷²⁰⁾ ⁽⁷²¹⁾ ⁽⁷²²⁾ ⁽⁷²³⁾ ⁽⁷²⁴⁾ ⁽⁷²⁵⁾ ⁽⁷²⁶⁾ ⁽⁷²⁷⁾ ⁽⁷²⁸⁾ ⁽⁷²⁹⁾ ⁽⁷³⁰⁾ ⁽⁷³¹⁾ ⁽⁷³²⁾ ⁽⁷³³⁾ ⁽⁷³⁴⁾ ⁽⁷³⁵⁾ ⁽⁷³⁶⁾ ⁽⁷³⁷⁾ ⁽⁷³⁸⁾ ⁽⁷³⁹⁾ ⁽⁷⁴⁰⁾ ⁽⁷⁴¹⁾ ⁽⁷⁴²⁾ ⁽⁷⁴³⁾ ⁽⁷⁴⁴⁾ ⁽⁷⁴⁵⁾ ⁽⁷⁴⁶⁾ ⁽⁷⁴⁷⁾ ⁽⁷⁴⁸⁾ ⁽⁷⁴⁹⁾ ⁽⁷⁵⁰⁾ ⁽⁷⁵¹⁾ ⁽⁷⁵²⁾ ⁽⁷⁵³⁾ ⁽⁷⁵⁴⁾ ⁽⁷⁵⁵⁾ ⁽⁷⁵⁶⁾ ⁽⁷⁵⁷⁾ ⁽⁷⁵⁸⁾ ⁽⁷⁵⁹⁾ ⁽⁷⁶⁰⁾ ⁽⁷⁶¹⁾ ⁽⁷⁶²⁾ ⁽⁷⁶³⁾ ⁽⁷⁶⁴⁾ ⁽⁷⁶⁵⁾ ⁽⁷⁶⁶⁾ ⁽⁷⁶⁷⁾ ⁽⁷⁶⁸⁾ ⁽⁷⁶⁹⁾ ⁽⁷⁷⁰⁾ ⁽⁷⁷¹⁾ ⁽⁷⁷²⁾ ⁽⁷⁷³⁾ ⁽⁷⁷⁴⁾ ⁽⁷⁷⁵⁾ ⁽⁷⁷⁶⁾ ⁽⁷⁷⁷⁾ ⁽⁷⁷⁸⁾ ⁽⁷⁷⁹⁾ ⁽⁷⁸⁰⁾ ⁽⁷⁸¹⁾ ⁽⁷⁸²⁾ ⁽⁷⁸³⁾ ⁽⁷⁸⁴⁾ ⁽⁷⁸⁵⁾ ⁽⁷⁸⁶⁾ ⁽⁷⁸⁷⁾ ⁽⁷⁸⁸⁾ ⁽⁷⁸⁹⁾ ⁽⁷⁹⁰⁾ ⁽⁷⁹¹⁾ ⁽⁷⁹²⁾ ⁽⁷⁹³⁾ ⁽⁷⁹⁴⁾ ⁽⁷⁹⁵⁾ ⁽⁷⁹⁶⁾ ⁽⁷⁹⁷⁾ ⁽⁷⁹⁸⁾ ⁽⁷⁹⁹⁾ ⁽⁸⁰⁰⁾ ⁽⁸⁰¹⁾ ⁽⁸⁰²⁾ ⁽⁸⁰³⁾ ⁽⁸⁰⁴⁾ ⁽⁸⁰⁵⁾ ⁽⁸⁰⁶⁾ ⁽⁸⁰⁷⁾ ⁽⁸⁰⁸⁾ ⁽⁸⁰⁹⁾ ⁽⁸¹⁰⁾ ⁽⁸¹¹⁾ ⁽⁸¹²⁾ ⁽⁸¹³⁾ ⁽⁸¹⁴⁾ ⁽⁸¹⁵⁾ ⁽⁸¹⁶⁾ ⁽⁸¹⁷⁾ ⁽⁸¹⁸⁾ ⁽⁸¹⁹⁾ ⁽⁸²⁰⁾ ⁽⁸²¹⁾ ⁽⁸²²⁾ ⁽⁸²³⁾ ⁽⁸²⁴⁾ ⁽⁸²⁵⁾ ⁽⁸²⁶⁾ ⁽⁸²⁷⁾ ⁽⁸²⁸⁾ ⁽⁸²⁹⁾ ⁽⁸³⁰⁾ ⁽⁸³¹⁾ ⁽⁸³²⁾ ⁽⁸³³⁾ ⁽⁸³⁴⁾ ⁽⁸³⁵⁾ ⁽⁸³⁶⁾ ⁽⁸³⁷⁾ ⁽⁸³⁸⁾ ⁽⁸³⁹⁾ ⁽⁸⁴⁰⁾ ⁽⁸⁴¹⁾ ⁽⁸⁴²⁾ ⁽⁸⁴³⁾ ⁽⁸⁴⁴⁾ ⁽⁸⁴⁵⁾ ⁽⁸⁴⁶⁾ ⁽⁸⁴⁷⁾ ⁽⁸⁴⁸⁾ ⁽⁸⁴⁹⁾ ⁽⁸⁵⁰⁾ ⁽⁸⁵¹⁾ ⁽⁸⁵²⁾ ⁽⁸⁵³⁾ ⁽⁸⁵⁴⁾ ⁽⁸⁵⁵⁾ ⁽⁸⁵⁶⁾ ⁽⁸⁵⁷⁾ ⁽⁸⁵⁸⁾ ⁽⁸⁵⁹⁾ ⁽⁸⁶⁰⁾ ⁽⁸⁶¹⁾ ⁽⁸⁶²⁾ ⁽⁸⁶³⁾ ⁽⁸⁶⁴⁾ ⁽⁸⁶⁵⁾ ⁽⁸⁶⁶⁾ ⁽⁸⁶⁷⁾ ⁽⁸⁶⁸⁾ ⁽⁸⁶⁹⁾ ⁽⁸⁷⁰⁾ ⁽⁸⁷¹⁾ ⁽⁸⁷²⁾ ⁽⁸⁷³⁾ ⁽⁸⁷⁴⁾ ⁽⁸⁷⁵⁾ ⁽⁸⁷⁶⁾ ⁽⁸⁷⁷⁾ ⁽⁸⁷⁸⁾ ⁽⁸⁷⁹⁾ ⁽⁸⁸⁰⁾ ⁽⁸⁸¹⁾ ⁽⁸⁸²⁾ ⁽⁸⁸³⁾ ⁽⁸⁸⁴⁾ ⁽⁸⁸⁵⁾ ⁽⁸⁸⁶⁾ ⁽⁸⁸⁷⁾ ⁽⁸⁸⁸⁾ ⁽⁸⁸⁹⁾ ⁽⁸⁹⁰⁾ ⁽⁸⁹¹⁾ ⁽⁸⁹²⁾ ⁽⁸⁹³⁾ ⁽⁸⁹⁴⁾ ⁽⁸⁹⁵⁾ ⁽⁸⁹⁶⁾ ⁽⁸⁹⁷⁾ ⁽⁸⁹⁸⁾ ⁽⁸⁹⁹⁾ ⁽⁹⁰⁰⁾ ⁽⁹⁰¹⁾ ⁽⁹⁰²⁾ ⁽⁹⁰³⁾ ⁽⁹⁰⁴⁾ ⁽⁹⁰⁵⁾ ⁽⁹⁰⁶⁾ ⁽⁹⁰⁷⁾ ⁽⁹⁰⁸⁾ ⁽⁹⁰⁹⁾ ⁽⁹¹⁰⁾ ⁽⁹¹¹⁾ ⁽⁹¹²⁾ ⁽⁹¹³⁾ ⁽⁹¹⁴⁾ ⁽⁹¹⁵⁾ ⁽⁹¹⁶⁾ ⁽⁹¹⁷⁾ ⁽⁹¹⁸⁾ ⁽⁹¹⁹⁾ ⁽⁹²⁰⁾ ⁽⁹²¹⁾ ⁽⁹²²⁾ ⁽⁹²³⁾ ⁽⁹²⁴⁾ ⁽⁹²⁵⁾ ⁽⁹²⁶⁾ ⁽⁹²⁷⁾ ⁽⁹²⁸⁾ ⁽⁹²⁹⁾ ⁽⁹³⁰⁾ ⁽⁹³¹⁾ ⁽⁹³²⁾ ⁽⁹³³⁾ ⁽⁹³⁴⁾ ⁽⁹³⁵⁾ ⁽⁹³⁶⁾ ⁽⁹³⁷⁾ ⁽⁹³⁸⁾ ⁽⁹³⁹⁾ ⁽⁹⁴⁰⁾ ⁽⁹⁴¹⁾ ⁽⁹⁴²⁾ ⁽⁹⁴³⁾ ⁽⁹⁴⁴⁾ ⁽⁹⁴⁵⁾ ⁽⁹⁴⁶⁾ ⁽⁹⁴⁷⁾ ⁽⁹⁴⁸⁾ ⁽⁹⁴⁹⁾ ⁽⁹⁵⁰⁾ ⁽⁹⁵¹⁾ ⁽⁹⁵²⁾ ⁽⁹⁵³⁾ ⁽⁹⁵⁴⁾ ⁽⁹⁵⁵⁾ ⁽⁹⁵⁶⁾ ⁽⁹⁵⁷⁾ ⁽⁹⁵⁸⁾ ⁽⁹⁵⁹⁾ ⁽⁹⁶⁰⁾ ⁽⁹⁶¹⁾ ⁽⁹⁶²⁾ ⁽⁹⁶³⁾ ⁽⁹⁶⁴⁾ ⁽⁹⁶⁵⁾ ⁽⁹⁶⁶⁾ ⁽⁹⁶⁷⁾ ⁽⁹⁶⁸⁾ ⁽⁹⁶⁹⁾ ⁽⁹⁷⁰⁾ ⁽⁹⁷¹⁾ ⁽⁹⁷²⁾ ⁽⁹⁷³⁾ ⁽⁹⁷⁴⁾ ⁽⁹⁷⁵⁾ ⁽⁹⁷⁶⁾ ⁽⁹⁷⁷⁾ ⁽⁹⁷⁸⁾ ⁽⁹⁷⁹⁾ ⁽⁹⁸⁰⁾ ⁽⁹⁸¹⁾ ⁽⁹⁸²⁾ ⁽⁹⁸³⁾ ⁽⁹⁸⁴⁾ ⁽⁹⁸⁵⁾ ⁽⁹⁸⁶⁾ ⁽⁹⁸⁷⁾ ⁽⁹⁸⁸⁾ ⁽⁹⁸⁹⁾ ⁽⁹⁹⁰⁾ ⁽⁹⁹¹⁾ ⁽⁹⁹²⁾ ⁽⁹⁹³⁾ ⁽⁹⁹⁴⁾ ⁽⁹⁹⁵⁾ ⁽⁹⁹⁶⁾ ⁽⁹⁹⁷⁾ ⁽⁹⁹⁸⁾ ⁽⁹⁹⁹⁾ ⁽¹⁰⁰⁰⁾

ある。

他方歳出面では、二八〇年度の豫算表および三〇六年度歳出總目 (A.v. Kremer: Ueber das Einnahmebudget, p. 304) によると、經常歳出しが計上されていない。更にヒラール所収 Abū l-Faḍl b. 'Abd al-Hamid によれば、二八〇年度の豫算表は二年間施行されたのち、第一―七項目について、週二日 (火曜と金曜) の休日を設け、休日分

の俸給を削除してこれを備蓄金とし、

al-Mu'tadid はこの備蓄金 (muwaffar) を……カリフ私庫 (bayt mal al-ḡassa) に移管するよう命じた。これは彼に必要なメッカ巡禮祭費、〔ヒザンへの〕夏季遠征費、建築費、天災、事故、災害等〔復興〕費、往來する使節、〔捕虜〕贖費に支出するためである (Hilal 22)。

とあるように、臨時費は經常歳入より繰入れたカリフの備蓄金でまかなっている。従つてアッバース朝の豫算表は經常歳計のみを對象とし、國家歳計の實際面でこれを均衡にする政策が要求され、その責任は宰相以下總務系高等官吏、即ち行政機關にあるとされたのである。

註

- (1) al-Mu'tadid の侍從長代理。Tab. VIII, 164 参照。
- (2) Tab. VIII, 199 の「287H」rabī' al-aḥir 月11日月曜日に東部ならびに西部方面監査廳 (diwān zinām al-maṣriq wa-l-maḡrib) を擔當しつつた書記 Muhammad [b. Aḥmad] b. 'Abd al-Ḥamid が死んだ」とあり、その地位から財政方面に詳しく、また時代も接近しているからヒラールのこの部分は高い信頼性があると考えられる。Ibn al-Nadīm : al-Fihrist, Cairo, N.D., p. 163; Ḡaḥṣ. 281.
- (3) al-Muwaffaq 278H 年 safar (II) 月21日。al-Mu'tamid 279H 年 raḡab (IV) 月 19 日。同日 al-Mu'tadid 即位。

(4) Hilal の叔父。360H 年々の Ta'yrib を著す。

(5) Ḡaḥṣiyāri (pp. 281-88) 所収 Abū l-Faḍl Muḥammad b. Aḥmad b. 'Abd al-Ḥamid : Aḥbār julafa' Bani l-Abbās 240。

(6) H.F. Amedroz : Abbasid administration in its decay, JRAS, 1913.

(7) [220H (835) 年] al-Mu'tasim が〔宰相〕al-Faḍl [b. Marwān] に對して變化を示し始めたが、その最初に行つたことは Aḥmad b. 'Ammār al-Ḥurāsāni にカリフ支出 (mafaqāt al-ḡassa) のうちの彼に對する監査を Nasr b. Mansūr b. Bassām に稅務ならびに全業務に對するの彼に對する監査を委ね、また同じく同様にするよう止めなかつたことである (Tab. VII, 233-34)。Hilal 182-84 にはカリフ (al-Mu'tadid) や總務系の官廳を通じて來た決裁や令狀でも當該監査廳で認可されなかつた例が傳えられている。

(8) 行政機關が現金處理をしてはならぬことは、280H 年度の歳出豫算表の文官吏の俸給に關する事項に「……ただ支給擔當の諸官廳 (dawāwin al-īṭa) の書記官、配當 (tafrīq) の諸課 (maḡālis) に働くその補佐官達やその部下、下働をおよび國庫 (bayt al-māl) の庫官達を除く。彼らは俸給を計算上の端數の金を蓄えたものから受取る (Hilal 20-21)」と記され、國庫官ら現金處理を行う官吏達の俸給費が豫算に計上されてゐないことから分る。

(9) バグダード以外の人頭稅の使途について、殘念ながら私見では資料不足のため不明である。

Supplemental Study in the System of Taxes on Merchants in the Sung 宋 Dynasty

Kaoru Umehara

The late Dr. Shigeshi Katō has already described in outline the system of taxes on merchants in the Sung dynasty, but the details of the system remain unclear. The author has here attempted to discover the details by investigating some of the aspects of the system: the organization of the tax-collecting posts (*shui-wu* 稅務), the routes of tax-collecting, the relation between the amount of the taxes and the revenue of the dynasty, some difficulties caused by tax-collecting, and the taxes on special goods.

Through the above method, he concludes that in the Sung dynasty goods were circulated all through the country by the merchants. The prosperity of K'ai-feng 開封 or Hang-chou 杭州 was brought about by the development of these merchants' business. The funds collected from the *shui-wu* established throughout the country began to occupy an important part of the dynasty's revenue from the Sung dynasty. The importance which commercial business had in the dynasty is recognized from the tax-system for the merchants. Nevertheless, we must not over-estimate the volume of such business, since it was found only in the cities and not in the rural districts.

The Fiscal Policy of the 'Abbāsīd State

Makoto Shimizu

Analysing the finances of the 'Abbāsīd State from the socio-economic standpoint, the author probes the relationship between the State and the newly-rising middle class. The 'Abbāsīd State, moving from the period of establishment to one of stability, gained control of the grain of the Sawād, (the replacement of the *misāḥa* by the *muqāsama* system at the end of the reign of al-Manṣūr) in order to sustain the mechanism of the State, and to restrain the merchants from seizing intermediate profits

which they had previously taken from the peasants, who were the taxpayers, by the system of the cadastral tax in money (*misāḥa*). But the middle class, consisting of merchants, proprietors (*tunnā*), and others who wielded economic power, gradually came to occupy an important position in the society and to have a severe antagonism against the bureaucratic State which was working to complete its internal expansion. The antagonism, nevertheless, found a compromise in the one-step retreat on the part of the State. This retreat meant in fact the farming out of tax managements (*ḡamān*) and the fosterage of the rank of purveyors through the business of public grain of the Sawād. It was indeed the presence of the complicated mechanism of the fiscal administration and the supervision by a centralized authority that permitted this excessive concession to those who, though favoured by financial capacity, were lacking in professional knowledge relative to the public fiscal economy. On the other hand, since this compromise between the State and the middle class imposed a consequent economic oppression upon the lower classes, the 'Abbāsīd State was doomed to be alienated from them, and this must be regarded as one of the fundamental causes of the internal disintegration of the State.

On the Decay of the Poll Tax in the Han 漢 Dynasty

Hidemasa Nagata

It is well known that the tax system of the Han dynasty had a poll tax or capitation called *suan-fu* 算賦. This tax derived from the *chün-fu* 軍賦, a tax which was paid in lieu of military service. All those, including women, who were recognized to be fifteen years old by the census periodically taken in every August through the rural organization system (*hsiang-li* 鄉里), were required to pay 120 *ch'ien* 錢 a year for *suan-fu* until the time they reached the age of fifty-six. But this capitation system disappeared with the fall of the Han dynasty, and a new system, levying a tax on each house, appeared in the Three Kingdoms period.

The author inquires why the *suan-fu* tax vanished, and finds an answer in the abandonment of the rural organization system and the